

Viva Kango

No.51

Campus News of Japanese Red Cross Hokkaido College of Nursing



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

〒090-0011 北海道北見市曙町664-1 TEL (0157) 66-3311 FAX (0157) 61-3125
mail to:kouhou@rchokkaido-cn.ac.jp http://www.rchokkaido-cn.ac.jp

発行日 / 2020年3月10日
編集・発行 / 広報委員会

日本赤十字北海道看護大学

創立20年を迎えた本学の歩み：本学は赤十字の大学として、日本赤十字社の災害救護訓練に参加してきました。今回は2007年ならびに2008年に北見市と旭川市で開催された訓練の様子を写真で振り返ります。

☆2007年7月12日、北見市川東において実施：本学学生(3年生)100名が傷病者役として参加しました。



赤十字救護班と自衛隊の協働



ERUの展開とトリアージ風景



救護エリアにおけるチェック



傷病者搬送訓練

☆2008年9月17日、旭川市神居において実施：本学学生30名が傷病者役として参加しました。



300名が参加した大規模訓練



自衛隊ヘリによる搬送



トリアージ訓練



トリアージ訓練

学生時代の思い出と今

看護学部 看護学科 七期生
日本赤十字北海道看護大学

老年看護学領域 助手

渡辺 温子

私が看護大学に入学したのは、父に送迎してもらえない距離にあるからという、なんともしまらない理由からでした。大学生生活は想像していたキャンパスライフ（妻木木聡主演のオレンジデイズを想像していた。）とはかけ離れており、朝から夕方までずっと授業でお尻は痛くなるし、実習になると眠れない日々。おかしいな？こんなはずではなかったと何度思ったことか。とりあえず目の前のことを！と必死になっていたら卒業でした。四年早かったです。

卒業後は看護師として病院に就職しました。三年目の時、受け持ちだった末期癌の患者さんから「どうしても一度は家に帰りたい。でも不安なので家に来てくれないか。知らない看護師さんに家に来られるのは嫌だ。」と相談を受けたことがあります。それならと思いましたが、当時、そのような体制はなく、行けないことをお詫びするしかありませんでした。結局、患者さんの希望で、訪問看護など外部のサービスは入らずに家に帰ることにになりました。患者さんは家に帰った後体調



が悪化し、翌日には病院に戻り、数日後に亡くなりました。患者さんが望んだ家で過ごす時間は、一日にも満たず終わりました。今でも時々思い返します。もつと何かできることがあったのではな

いか。もう少し家で過ごすことができたのではないかと。このときから、地域で病や障害を抱えている人は、どんなふうになら生活しているのか知りたいと考えるようになりました。保健師になるか訪問看護師になるか迷いましたが、健康なときも病気のときもずっと関われる保健師になろうと思いつきました。

地域にでると、まさしく目から鱗の連続で、今まで病院で通用していたことは通用せず、いかに自分が傲慢であったか痛感しました。また、住民の方、患者会、ボランティア、地域おこし協力隊、NPO団体など専門職以外の方ともたくさん出会い、それぞれの思いや考えに触れることができたのは本当に宝ものです。現在は母校に戻り、助手として働かせていただいています。大それたことはできませんが、これまで出会った方々の思いや考えを少しでも学生にお伝えできればと思います。高い志や強い動機もないまま看護大学に入り、スーパードレジャーやカフェの店員など、他の職業に憧れることもありましたが、看護師になって良かったです。看護師といってもいろいろな道があります。可能性いっぱいの子の皆さんが羨ましいです。皆さんにたくさん



看護学部 看護学科 八期生
北見赤十字病院 北七階病棟
看護師

中嶋 誉

皆さんこんにちは。日本赤十字北海道看護大学八期生の中嶋です。大学を卒業後は、北見赤十字病院に就職し、看護師として十年が経ちました。就職後は、看護に情熱を注ぐ上司や切磋琢磨できる先輩・後輩とともに働くことができ、看護の楽しさを日々感じています。そして、現在では高齢者へのケアや看護研究・看護教育を学ぶために、看護師として働きながら、本学で大学院生としての生活も送っています。様々な先生たちのご縁もあり、このような形で、私の看護学生時代を振り返る機会をいただきましたことを、とても感謝しています。

実をいうと、Viva Kangoへの寄稿は、第二十八号以来「回目」となります。当時は、卒業を間近に控え、これまで出会ってきた人への感謝や別れる事の寂しさなど、様々な思いを抱いて書いた事を覚えています。改めて、学生時代を振り返ってみても、やはり看護学実習が最初に思い出されます。勉強をおろそかにしていた私は、とても実習で苦労しました。看護の方針や毎日の行動計画について、混乱しながら発表する私に対して、実習指導者と先生は、出来ていない事をはっきりと指摘しつつ、出



ても丁寧に認めてくれました。課題に追われる日々を送りながらも、患者様に出来るケアが増えることで、小さな自信をコツコツと積み重ねて無事(?)実習を乗り越えることが出来ました。

今では、私も実習指導者の役割を担い、日々学生への指導について試行錯誤を繰り返しています。患者様の一つ一つの言動に反応し、「どのような意味があるのか」、「なぜなのか」と純粋な気持ちで患者様と向き合う学生の姿は、看護師として初心を思い出させてくれます。そして、私たちが毎日みている患者様のことであっても、学生から教えられることが多くあります。看護カンファレンスの場面においても、学生との議論であるからこそ、患者様の新たな一面が描き出されることがよくあるのです。学生と指導者というそれぞれの立場であっても、患者様の安心・安全を願う気持ちとは共通しており、最近の私としては、ケアを提供するスタッフの一員としての認識に変化しつつあります。

学生の皆さん、これからも基本を大切に、一緒に学んでいきましょう。そして、周囲の仲間と協力して、思う存分学生生活を楽しんでください。応援しています。

看護学部 看護学科 九期生
北見赤十字病院 西六階病棟
看護師

佐久間 優 紀

北見赤十字病院で働くこと、早十年。毎日があつという間で、患者や家族との関わりを振り返る余裕はありません。実習をしている頃は、一人の患者を担当させてもらい、毎日その患者の反応や先輩方の助言から、自分の看護を振り返ることができていたと思います。実習を乗り越えるため、アセスメントに足りない情報を取るために「明日はこれを聞こう」などと動機は不純していますが、その人のことを考え、その人が何に困っているのかなど、常に考える毎日だったと思います。実習になると、よく個別性と言われることが多くなりますが、学生の頃は個別性と言われても、いまちピンとこなく、自分では個別性を意識しているつもりでも、先輩方からすると「どこに個別性があるの？」と言われる悩みこともありました。しかし、毎日その人のことを考え続けることで、自然と個別性が生まれていたと思います。現在看護師として働き、学ぶ立場から教える立場となりました。私もよく個別性と口にす



るようになりました。私が学生だった時と同様に、看護の視点から個別性について話しても理解を示してくれる学生はあまりいませんでした。なので、学生の目線に置き換えて話すことがあります。「みんなができるから、あなたもできる」「あの子と仲良くなるために自分はどうしたらよいか」などと考えてもらうと「そんな風に思われたら腹が立つ。私は私」というような考えがでたり、「仲良くないからその人のことを考えてメールしたりする」などと個別性を考えるような発言が出てきます。そのような話をするとき堅かった表情が少し柔らかくなるように思えます。就職してしまつと、なかなかその人のことだけを考えると、学生のうちから個別性というのが、どんなものなのか少しでも考えることができる、働き始めてから成長するきっかけになると思います。

看護学部 看護学科 十期生
旭川赤十字病院 六階きた病棟
看護師

木下 洋 平

私が十期生として本学に入学したのは二〇〇八年でした。漠然と「カッコいい看護師になりたい」という思いを抱いていたと記憶しています。しかしながら実際は赤点を取らない程度にほどほどに勉強をして、「大学生」という今しかない時間を楽しむことに注力していました。サークルを作ってみたり（アウトドア同好会・いきもの探究会はまだまだありますか？）、他大学の学生との交流、海外のNPOのスタディツアー参加などから「いろんな世界があるんだ」という事を知り、「自分はどの進みたいのか？」を余計に考えることになりました。



そんな学生生活の中で大きな転機となったのは三年生の春休み、二〇一一年の東日本大震災でした。「何かしなくては」という思いで、災害Beats研究会の初期メンバーとして被災地での活動を行い、「災害」に強く興味をもつようになりました。「災害」に携われる看護師になりたいという思いから、入職時は

ICU・CCU病棟で勤務し、看護師としての基礎を学びました。就職してからは「もっと学生時代に勉強しておけばよかった」と感じることも少なくありませんでした。学生時代のツケを払う意味で勉強の毎日を過ごしました。そんな中で、もっと深く災害看護を学びたいという思いから五年目の時に本学の大学院へ進学し、先生方、職場のスタッフの多大な支援のもとに、三年間かけて卒業することができました。現在では看護師八年目（四月からは九年目）となり、脳神経外科病棟で勤務しながら、北海道DMAT隊員として研修を受けたり、院内外における災害研修や訓練などを通して修行の日々を送っています。

今、学生時代を振り返って思うことは、「全てが繋がって今がある」ということです。学生時代の「出来ごと・思い」が、今の看護師としての目標の根源になっていると感じています。その目標を自分の中で崩さず、良い意味で周りに染まり切らないことで自分の目標にも近づけている気がします。

また、目標を口に出すことで、思わぬところからチャンスが舞い込むこともありました。「こんな事を目標にするのは生意気かな」と思うような事でも、どんどん口に出すことで近づけるのではないかと思います。皆さんが今、憧れていたり、目標としている人、理想の看護師像があるのであればそれを大事にしたいなと思います。そして、貴重な今の時間を思い残すことなく、思いっきり楽しんでください。



瑞宝双光章につながった看護の道

基礎看護学領域 特任教授 山川京子



一九七一年、私は、子どもは苦手でお産は恐ろしいと思っている看護学生だった。はじめての実習は、小児看護学実習で十歳の肺炎の患者さんを受け持った。案の定、ろくに話しができず、関係性を構築できないさんざんな実習だった。看護とは何か全く分からず、看護学概論の教授

に相談すると、私も分からないのよ、これから一緒に創っていくのよ。と言われ、次の母性看護学実習は相当気が重かった。母性看護学実習では、初日に入院されたお産の患者さんを受け持った。お産はすぐにはじまり、分娩室は妊婦さんと、助産師と学生の私だ

けだった。助産師は妊婦さんのそばでしっかり手を握っているようにと伝えてくれた。私は妊婦さんの手を握り続け、お産は順調に進んだ。経産婦だった妊婦さんは力み方も上手で、まもなく元気な男の子が誕生し、大きな産声が生産室に響き渡った。助産師が「五体満足の立派な男のお子さんですよ」と言って赤ちゃんをご対面させたときに、お母さんになったその人は急に感極まったように涙を流しながらありがとございませと繰り返して、学生である私の手を力強く握り返して離さなかった。そして、「妊娠三ヶ月の頃に風邪を拗らせて、胸のX線写真を撮っていたので五体満足で生まれてくるかずっと心配だった」と言った。気がついたら私も感動で涙が止まらず、手を握り返しながらおめでとございませと繰り返していた。エコーもない、家族の立ち会いもない時代のお産の場面であった。

看護とは、学生さえその人の人生のドラマに寄り添えるドラマづくりだと実感し、そこから私の看護の道がはじまった。一人一人のドラマが最も良い物語になるように、仲間と、チームと、組織と、地域とつながり、定年までの三十八年間に過ぎた。看護を創る一人になろうと歩みながら、教員の道につながり、子どもを三人育てることもできた。あの実習が、私の人生のドラマをプロデュースしてくれたと思うにつけ、幸せな気持ちになるのである。

日本災害看護学会 第21回年次大会

去る九月五日・六日の二日間、日本災害看護学会第二十一回年次大会が開催されました。テーマを「平成を紐とき、次代に挑む災害看護」として、平成の三十年間に起こった様々な災害を振り返り、次代の災害看護がどうあるべきかを、おもに人々の命と生活を守る視点から捉え

たプログラムが展開されました。二日間で六〇〇名を超えるたくさんのご参加を頂き、災害に従事する看護職、その他の医療職はもろろんのこと、災害に関わる多種多様な職域の方々とのつながりが着実に強くなっていることを実感いたしました。

